
恋愛尚早（後）

CC

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛尚早（後）

【Nコード】

N6158Q

【作者名】

CC

【あらすじ】

初めて出会ったのは若葉がまだ小学生、政宗は大学生だった。若葉が高校生になった今、後少し待っただけでいいのだと頭では理解しているはずなのに・・・。

昇降口から登校する生徒からは逆側の、あまり生徒が通らない階段の裏で壁に寄りかかりながら目覚まし代わりの一服を味わっていた。

「おはよう」という、朝の挨拶が止め処なく聞こえてくる。

その、幾つもの挨拶の中から耳に馴染んだ声を拾うと、政宗は反射的に階段の下から顔を出した。

「おはようございます」

目が合うと、若葉は驚いたように視線を逸らし、小さく言って背を向ける。

（……焦りすぎたな）

心の中で呟くと、煙草を啜えたまま舌打ちする。

（もうそんな年でもねえのに）

背中を押しつけたコンクリートの壁はひんやりと冷たく、まるで「頭を冷やせ」とでも言っているようだと思った。

＊

大学進学の際に引っ越してきたこの街で、政宗は和泉姉弟と出逢った。

当時二人はまだランドセルを背負った小学生で、弟の双葉は今でこそトレードマークであるメガネをまだかけていなかった。

「大学生？ 本当に？」

何度か道端ですれ違った後、姉の若葉はその勝気な目で睨むようにしながら政宗に尋ねた。

身長180センチの政宗を見上げる若葉は長い黒髪を左右で結び、手に水色の縄跳びを持っている。双葉は姉の背中に隠れるようにしながら政宗をちらちらと窺っていた。

「どういう意味だ？」

子供などあまり相手にした事が無い政宗は一瞬たじろぎ、何と答えたらいいのか、考えた。

「だって勉強が得意そうに見えないもん」

えへん、とでも言う様に胸を張り、若葉は言い切った。

ああ、こういう大人を大人と見ていない様な、生意気な女の子が昔クラスに居たな、などと思いながらつい、政宗がにやり、と笑ってしまうと。

「……今、バカにしたでしょっ」

言うが早いのか、若葉は手にした縄跳びを地面に落とすと政宗の腰目掛けてジーンズを履いた右足を振り上げた。

「——ってっ！！」

がくん、と腰が横に折れ、急な出来ごとに腰を押さえながら政宗が目を見開く。

「小学生だからって舐めんなよ」

言ってぎろり、と鋭く睨む若葉の縄跳びを、後ろで双葉がコソコソと拾っていた。

（あの時は、あんなクソガキ共と仲良くなるなんて思ってもみなかったな）

廊下に出て柔らかな日差しを見上げ、目を細めながら政宗は思う。気がつくのと、啞えたタバコが灰を長くしていて、慌てて一張羅の薄汚れた白衣のポケットから携帯灰皿を取り出した。

「あ、このマンガ、知ってます！」

先に仲良くなったのは矢張り、同性同士という事もあってか、弟の双葉の方だった。

大人しい双葉はいつの間にか政宗に懐いて、暇さえあれば政宗のアパートに入り浸っていた。

その、弟を迎えに若葉が度々来るようになり、読みかけのマンガを放さない双葉に付き合って若葉も政宗の部屋に留まるようになっていった。

「ねえ、この布団、いつになったら畳むの？」

狭くて汚い政宗の部屋に上がる度に、若葉は爪先でそろそろと歩いては文句を言った。

「万年床って言うんでしょ？ 畳にカビが生えるってお母さんが言ってたよ？」

「いいんだよ、別に。カビよりも好きな時に寝れる方が大切だから」

「そんなんだから彼女の一人も出来ないんだよ」

蔑むように言って捨てた若葉に、小学生のくせに末恐ろしい女だな、と政宗は思った。

「いつも変なTシャツ着ててお洒落もしないし、髭がチヨロチヨロ生えてるし、髪はボサボサだし。そんなんじゃないってなっても彼女なんて出来ないよ？」

さも当然だと言わんばかりに胸を張って言い切った若葉に、政宗は実際には彼女が居る事を言い出せなくなってしまった。

散らかった自分のアパートに招くより、キレイに整理整頓された彼女の部屋を尋ねる方が良かったからこの界限では彼女を見かけないだけで、実際には同じ大学内に他の大学生同様、普通に彼女が居た。大学に入って直ぐに自然と仲良くなったその彼女とは、大学卒業と同時に自然消滅してしまったのだけれど。

「だいたい、髪なんて朝ちよっと梳かせばいいだけだし、髭だって剃るのにそんなに時間はかからないでしょ？ 何でしないの？」

愚図愚図と文句を続ける若葉を適当にあしらいながら政宗は、
（オメーはまだ子供だから分からないかしんねえけど、この薄ら
と生えた髭がいつていうヤツも居るんだよ）
と、心の中で返した。

そしてそれは、若葉が中学を卒業する少し前の話に繋がる。

「――双葉、来てる？」

中学生にもなると、和泉姉弟はあまり政宗の部屋へは来なくなっ
ていた。

元々、若葉は双葉が居ない限り政宗の部屋へは来なかったので、
双葉が友達と遊んで政宗を訪ねなくなっただけからは若葉も来なくなっ
ていた。

それがある時の夕方、久しぶりに政宗の部屋のドアを叩いた。

「え？ あ、いや、来てねえぞ」

無事就職した彼女との交際が自然消滅し始めていた頃だった。

大学を留年した政宗はまだ酒の残る頭を必死に回転させて返事を
しながら、布団の傍らに投げ出していた大人向けの本を数冊、若葉
から見えないように慌てて隠した。

「……そっか。今日はお母さんの誕生日だから外にご飯を食べに行
こうって約束してたのにまだ帰ってこないから」

そんな政宗の行動には全く気付く様子もなく、若葉は言ってため
息をついた。

「最近、政宗のトコには来てないでしょ、双葉？」

「ああ、そうだな。もう随分来てないな」

「って言うか、相変わらず万年床だし、散らかり放題だね」

「うるせーですよ」

ちっと舌打ちして返すと、襟首が伸びきったTシャツの脇から手
を入れて腹をぼりぼりと掻く。

「その様子じゃ、未だに彼女が出来ないみたいだね」

にやっと笑う若葉の髪は肩のあたりで短く切り揃えられている。眉のあたりでぱつとりと切り揃えられていた前髪は額を出して斜めに下ろされていて、丸くて大きな瞳が片方だけ、勿体つけるかのように見え隠れしていた。

「そうだ！ほら、あの読みかけだったマンガ、あれっでもう最終回になった？」

少し見ない間に随分と大人っぽくなったな。これは意外と将来化けるかもしれねえな。

気がつくとなんな事を考えている自分に気づき、政宗がその考えを振り払う様に頭を大きく左右に振っていると、若葉が何か言いながら粗末な玄関先で靴を脱いでいる。

「あ、こら、勝手に上がるなっ」

気付いて政宗は慌てて制したが、

「え、なにが？」

と、若葉は昔と至って変わらない素振りですんずんと上がりこんでくる。

「何でってお前、若い男の部屋に女の子が一人で上がったらダメだろ」

「何を今更。ついこの前まで普通に上がったのに？」

ついこの前っていつだよ。

政宗の小さい呟きは布団に落ちて若葉の耳には届かない。

若葉は勝手知ったる様子で壁際の本棚まで進むと、もう直ぐ30巻を超えようかという所まで続いているマンガを手を取った。

「わ、やっぱりまだ続いてるんだ、これ。確か24巻位まで読んだ気が……」

言って若葉は数冊を手にとると、そのままその場にしゃがみ込む。「そうそう、試合が延長戦に入った所までだったから気になったんだよね」

ペラペラとページを捲ってマンガに視線を落とす若葉が、布団の上座る政宗の正面に居た。

これから出かけるからなのだろう、若葉は白いシャツに紺色のひざ丈のスカートを履いている。小学生の頃はいつもジーンズばかりを履いていたのに、急に女らしくなった気がして、政宗は再び視線を逸らすと顔を俯かせて頭を掻き毟った。

「それ、貸すから持ってけ」

言って「帰れ」とばかりに手をひらひらと振るが、若葉はマンガに夢中で振り向こうともしない。

「ほら、母ちゃんが待ってるんだろ？」

何故か少しだけイライラしている自分がいた。

何に腹を立てているのか、その時は分からなかったがもしかしたら、まだまだ子供だと思っていた若葉に良からぬ感情を抱いてしまいそうで怖かったのかもしれない。

「双葉も帰ってるかもしれねえから」

政宗は言って唇を結ぶと、マンガを手にした若葉の腕を掴んで引っ張った。

「痛っ」

急に腕を掴まれて驚いたのか、目を見開いて振り向いた若葉はそのまま政宗の胸を正拳突きで弾き飛ばした。

「ぐほっ……っ」

一瞬呼吸が止まり、政宗は布団の上に仰向けに倒れこんだ。

「あ、ごめん、つい驚いて……」

慌てて駆け寄る若葉が政宗の顔を覗きこむ。

黒い髪が白い頬にかかる。黒目がちな丸い目が痛みに顔を歪める政宗を見つめていた。

「若い男の部屋に女の子が簡単に上がるもんじゃないってさっき言っただけ、全面撤回させてもらいます」

胸を押されたせいで苦しい呼吸を整えながら、政宗は言った。

「ご、ごめんなさい……」

「そっ、いやお前は腕っ節は強かったんだよな、昔から」

「だからごめんなさいって」

眉根を寄せながら謝る若葉の顔が目の前にあった。

長い睫毛が幾分伏せられ、少し潤んだようにも見える瞳に政宗が映り込んでいた。

「……分かったから帰れ」

若葉の瞳の中の自分と目が合った気がした。

その、瞳の中のもう一人の自分に胸の内を見透かされた様な気がして、政宗は慌てて若葉から離れるように寝返りをうつと、畳の上に胡坐をかいて座った。

「……本当にごめん」

若葉は言って立ち上がり、政宗に小さく頭を下げた。

「本、持ってっていいから。後でポストにでも返しといて」

「……」

政宗が言うと、若葉は黙って本を拾い上げてそのまま、じっと政宗を見下ろしている。

「だからもういいって」

言って「バイバイ」と手を振るが、若葉は立ちつくしたまま政宗を見つめている。

「な、何だよ……」

真っ直ぐに向けられる視線に、自ずと政宗の心臓がドキドキと跳ねる。

若葉が何を考えているのか、これから何が起きるのかと考え、若葉の胸の内など全く想像がつかない癖に何かを期待する自分が居た。

「お、オレ、実は彼女が……」

もう何日も会ってない上に連絡もない女を彼女だと言えるかどうかは微妙だとも思ったが、はっきりと別れ話をしたわけではなし、付き合っていると言っても嘘ではないだろう。一瞬のうちにそれだけを考え、しかし、それをここで告白することに何の意味があるのかとも思ったが、焦る気持ちから政宗がそう口走った、その時だった。

「汚い髭」

口を開いた若葉は言い、言葉とは裏腹ににっと笑った。

「はあ？」

「無精髭、きったない」

念を押すように若葉はもう一度言うと、本を胸に抱えてスカートの裾を翻すと帰って行ったのだった。

「……大人を弄ぶなよ」

乱暴にボタン、と音を立てて閉められたドアを見つめ、独り呟きながら政宗は言うど、がっくりと頭を落とす。

そうしてそのままごろり、と身体を横たえると深いため息を一つ、ついた。

＊

「タバコ、吸っていいのか」

低い声で言われ、昔を懐かしんでいた政宗は反射的に振り向いた。

「校内は禁煙だろう」

冷ややかな目で政宗を見ていたのはいつの間にか背後に立っていた深琴で、目が合うとふん、と鼻で息を吐いた。

「ここは俺の秘密基地だからいいの」

言いながら政宗はタバコを消し、携帯灰皿をポケットに仕舞う。

「若葉と何かあったのか」

政宗から視線を外し、既に若葉が去った後を追う様に深琴が廊下の奥を見やる。

「何もねーよ」

短く返したが、深琴は納得がいけない様子で黙りこんでいる。

「先生と生徒だよ？何かあったら不味いだろ」

我ながら随分と自虐的だと政宗は思い、口尻を上げてにやり、と笑った。

『――あ、ぶつけたのはオレ』

寄せ集めた机の下で、若葉の腕を掴んでいたのは須賀だったか。背中を向けた若葉の表情は見えなかったが、須賀は机の下を覗きこんだ政宗に気付く事無く、真っ直ぐに若葉を正面から見つめた。た。

「屁理屈をこねてグズグズしてたら、若葉はきつと手に入らないよ」

『別に他人にどう見られようとボクは気にしません』

そう言い切った時と同じ、深琴は政宗の心の中を見透かすように鋭い視線を投げる。

「お前に何が分かるってんだよ」

吐き捨てて痒くもない頭を掻き筆ると、政宗は足早に階段を上る。
(くそっ)

胸の中で悪態をつく、年甲斐もなく焦る自分にため息をついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6158q/>

恋愛尚早（後）

2011年2月3日21時25分発行